

シリーズ 私の一冊の本

環境科学研究所 坂田昌弘 先生

湯川秀樹著 『旅人:ある物理学者の回想』(角川文庫 1883)

閲覧室 1階 289.1/Y97 角川書店 出版

2007年は、湯川秀樹博士の生誕100周年に当たる。博士は、1949年に「中間子理論」によって日本人初のノーベル賞（物理学賞）に輝いたが、戦争で荒廃した人々の心に勇気と希望を与えたことから、その受賞には、現在とは比較にならないほど大きな価値があったと思われる。しかも、頭脳だけを頼りに、紙と鉛筆だけで成し遂げられたことは、見事としか言いようがない。

本書は、博士が生まれてから、中間子論に到達するまでの27年数ヶ月の間に起こった様々な出来事と、それに対するその時々の博士自身の反応についての記録である。博士の淡々とした瞑想感を漂わせる文章には、文筆家としても類まれな才能を感じる。私は、本書を大学生の頃に読んだと思うが、後一步まで行きながら、なかなか「中間子」の概念へと飛躍ができず悶々とする姿など、科学者としての生き様に深い感銘を受けたことを記憶している。しかし、今回この一文を書くに当たって読み返してみると、上記以外にも、子供の才能を見抜く母親や教師の重要性を記した箇所に強い感動を覚えた。その箇所を以下に紹介する。

博士は、「孤独で我執の強い人間」と自身を語っている。事実、子供の頃から口数が少なく、面倒なことは全て「言わん」の一言で済ましたため、「イワンちゃん」というあだ名が付けられたほどであった。父親（小川琢治、有名な地理学者で当時京大教授）は、5人の子供全てを学者にしたいと思っていたのだが、余りに内向的な性格から、秀樹には別の生き方、すなわち大学に進学せずに専門学校にでも行かせた方が良くはないかとの考えがよぎった。しかし、相談をもちかけられた母親は毅然として、「目立たない子もあるものです。目立つ子や才気走った子がすぐれた仕事をする人間になるというわけでは御座いますまい。それに、どの子にも同じようにしてやりたいと存じます。不公平なことは出来ません」と強く反論した。さらに、同じく相談を受けた中学校（京都一中）の校長は、琢治の問いかけを真っ向から否定し、秀樹の飛び抜けた数学の才能とその将来性を保証した。

その他にも、本書には、子供の進路を決めるうえで学校教育における教師の役割がいかに大切であるかが述べられている。現在、学校教育や教師のあり方が問われ、政府の教育再生会議等で議論されているが、この方面においても本書は含蓄に富んだ書と言える。